
妖幻抄 2章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 2章

【Zコード】

Z0839A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

一人だけ、生き残った人間の少女・明と、それを拾った人狼の少年・氷雨なかなか、気を許そうとしない明に彼は！？

2章・事件発生！

「明、こいつこいつ、降りてこいって！」

「ひるさいつ！お前、あたしに何しようとしたの？」

明は、屋根に登って、氷雨を威嚇していた。

「なにして…ただ、撫でようとしただけだよ…と、とにかく危険だ！」

「来るなつ、来てみるよつ、舌噛みきつてやる！死ぬだつ！」

明は、氷雨に向けて怒鳴る。

「悪かつた、謝る…だから、な？いい子だ、降りてこい」
氷雨は、いつの間にか、懇願している自分に気づく。
周りには、近所の、野次馬が集まっていた。

「いやだつ！」

(あ～…下心、出したのがマズかつたのか？思いつきり、警戒され
てるし)

「しょーがねえ、そこ動くなよ？」

氷雨は、身軽に、屋根に飛び上がった。

「やだーぐるなよつ！？」

後ずさる明。

「悪かつたよ、ごめんな、明…明？」

肩を抱き寄せてやるが、明は、俯いたまま震えていた。

「ほり、震えてンじやねえか、帰るぞ？」

顔を、覗き込んだ氷雨は、ぎくりとなつた。

明が、泣いている。

彼女は、氷雨を睨みつけると、屋根から飛び降りた。

「お、おいつ！」

明は、俊敏に人混みを駆け抜けると、小屋の中へ、逃げこんでしま
つた。

「おいつ、明つ！？」

2章・明と氷雨（前書き）

仲がいいのか、悪いのかよく分からぬ一人。
氷雨は、明に興味をもち始めて！？

2章・明と氷雨

氷雨は、少し距離を置いて座っている明を、横目で見てから、溜め息をついた。

「俺、出かけるけど…ついてくるか？」

「行かない」

即答である。

少し間をおいて、氷雨は、根気よく話しかけた。

「腹、へらないのか？喰いたい物、あるか？」

「いらない、出かけるなら…出かけてくればいいだろ？」

「はあ…今朝は、悪かつたって言つてるだろ？頼むから、機嫌なおしてくれよ」

「べ、別につ、怒つてなんかないぞ…ただ、分かんない、だけだ」

「分かんないつて、何がだよ、ん？」

氷雨は、距離を詰めて、明の顔を覗き込んだ。

少し前までは、会話はおろか、近づくだけでも、逃げていた明だった。

しかし彼女は、真っ直ぐに、氷雨を見るようになった。

「不安じゃないんだ、前みたいに。人間に、似ているからか？でも、あたしたちと、お前は違うのに」

氷雨は、息をのんだ。

明の瞳だ、彼女の瞳は、深い、青色だったのだ。

(青い…キレイ、だ)

「どうしたんだ？氷雨

固まっていた氷雨に、明は、怪訝そうに眉をひそめた。

「いや…なんでも、ねえ。それより、名前…やつと覚えたな」

少し、近づいたと思った氷雨。だが次に、彼女が言つた言葉は、彼を、かなりへこませた。

「覚えたわけじゃない、ただ、言わなかつただけだ……気が変わった、外に行くんだるうつ、早く行こう」

「あ、」りや、散歩の前に、躰しふはだな

「躰？」

「お前は、俺のペツト。お前の主人は誰だ？」

「あたしは誰にも媚びない」

「媚びなかつたら、外には出さないぜ？」

「ふんつ、媚びるもんかつ、なら勝手に出てく」

出て行こうとした明を、氷雨は、腕を掴んで引き留めた。

「いいのかあ？ そんなこと言つて……お前一人でいたら、あつとこう間に喰われちまうぜ？」

「そう簡単に、死んで溜まるもんかつ、放せ！」

「行くぞ、絶対に、俺から離れるな」

氷雨は、掴んでいた彼女の手を、そつと放した。

「え、いいのか？ 外に出ても」

「いいから言つたんだ、勝手に、いなくなるなよ？」

「分かつた！」

いきなりの笑顔に、氷雨は面食らう。

（かつ、かわいい…）

「明、」！ 勝手に先行くなつてんだろつ、ひうに、聞いてんのか！」

（さすが、野生の人間。水を得た魚みてえに、活き活きしてやがる

（つ）

明は、氷雨よりも離れた場所で、彼に向かつて、舌を出していた。

「からかつてんな、あいつつ……こら明つ、戻つてこいー！」

明は、しばらく逡巡するようにしてから、氷雨の側に、走ってきた。

「よし、よし、いい子だな……そろそろ戻んつ」

氷雨は、そこから先の言葉を、喉に詰ませた。

明は、氷雨の唇を一舐めすると、悪戯っぽく笑いながら、森の中に、

走つていってしまった。

「あっ、あ、いつ！ただじゃおかねえつ！？」

氷雨は、気配を消して、明のあとを追った。

「ふんっ、オトコなんてちゅうこちゅうい」

立ち止まって、川の水を飲み、顔を洗う明。

氷雨は、溜め息をつきながら、それをみていた。
木の枝に足をかけて、宙づりになつている。

（なあにやつてんだか、完つ璧に俺のこと忘れてやがるっ）

口元を拭うと、歩き出す明、藪に頭をつっこんで、何かを捜しているようだ。

（なにしてんだ？あいつ…あ、なんか捕まえた）
片手で、手近な葉を千切ると、その葉の中に、もつ狂手の中身を包んだ。

葉ぐずを払うと、大きく伸びをし、草地に転がる。

（暢気なモンだなあ、おい…今襲われたら、ひとたまりもねえぞ。
ま、殺させねえけど）

「見つけたぞ明！もう逃がさねえっ」

背後に着地した彼を、明は飛びのいて除けた。
目くらましをして、走り出す。

「おつと、人間じときが敵つかよ！逃がすかっ！」

軽々と走る明。

しかし、石に足を捉われて、何度も転び、傷だらけだ。

（血の足跡、ん…動きが止まつたか、今だ！）

「捕まえたっ！」

「さやああつ！」

一人は、もつれ合いながら、傾斜を転がる。そしてそのまま、池に落ちた。

「ふはっ！なにするんだ、氷雨！」

「しかえしだ、さつきの…」

しれつ、と言ひてのける氷雨。

「怒ったのか？」

「ぜへんぜん、むしろ、嬉しかつたぜえ」

「悪趣味だつ」ふいつ、とそっぽを向く明。

「ん？」

「あたしも、お前もひどい格好だ」

「明、足…ケガしたのか？血の匂こがする」

「ああ…さつき走ったときに、口で切ったんだ。まつておけば止む治る
「見せろ…」

氷雨は、明を抱き上げた。

「やめんな、いつ、いらないつて、言つてるだら、氷雨」

違和感を感じて、明は身じろいだ。

「かすり傷だ、深くなくて…よかつたな」

「そうだな、氷雨、もう放してもいいぞ」

「ダメだ、このまま連れてく。傷、痛むだろ？」

「いらないって！」

「ここから、黙つてろ。お転婆め

「なにいつ！」あまりの恥ずかしさで、血が上つた明は、氷雨の首筋に噛みついた。

「いでで、噛むなつて…こでつ…」

「さつさと戻るが、まだ全部、お前に、氣を許した訳じゃないんだからな」

「なら全部、許させるまでだ」

「強引だな…」

「なんどでも」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0839a/>

妖幻抄 2章

2010年11月12日04時31分発行